白門経友会

経済学部長から白門経友会のみなさまへのご挨拶

中央大学経済学部長　山﨑朗

二〇一九年十一月から経済学部長を務めております、山﨑朗と申します。常日頃より、白門経友会の会員のみなさま方には大変お世話になっております。この場をお借りして御礼を申し上げます。

二〇二〇年春頃から猛威を振るい始めたコロナウィルス感染拡大により、学部運営はこれまでに経験したことのない想定外の事態に直面し、迅速かつ適切な対応を求められることとなりました。当時学部長就任から四カ月程度しか経っておらず、いついかなる対応策をいかに実施すべきか、多くの難しい選択に迫られました。しかし、学部長補佐の先生方や事務職員のみなさん、そして教員のみなさんのご提言やご協力により、前期授業のオンライン化（遠隔授業と呼んでおります）や学生へのパソコンやwi-fiの貸し出し、経済学部独自の奨学金の設立など、可能な限りの対応策が実施できたのではないかと考えております。

二〇二〇年度前期は、すべての授業を遠隔授業にせざるをえず、学生のキャンパスへの入構も原則禁止となりました。ご父兄や文部科学省からは教室での面接授業を実施して欲しいという要望が強く、後期は演習、語学などの少人数科目については面接授業も行うこととといたしました。

すべて遠隔授業となった前期の授業形式についての学生アンケートでは、オンラインによる授業について、「かなり身についた」五%、「ある程度身についた」四二%に対して、「まったく身につかなかった」四%、「あまり身につかなかった」二一%という回答になりました。さらに、望ましいオンライン授業の比率についての問いに対しては、「すべてオンライン授業が望ましい」が二〇%、「八〇%以上」が二五%、「六〇%以上」が二一%となり、六〇%以上と回答した学生の比率は六六%にも上りました。私たちの予想をはるかに上回る結果となり、またご父兄の要望や文部科学省の要請とも異なる結果となりました。

withコロナの一年間が過ぎ、二〇二一年もwithコロナの新しい年となりそうですが、withコロナ時代に生じた不可逆的変化は、afterコロナ時代における新しい教育システムへの進化へとつながっていくと思われます。

すでにアメリカの大学などではVRを活用した、より臨場感の高い遠隔授業システムが開始されているようです。私たちも新しい教育のあり方について、真摯に検討し、迅速に対応していく必要があると考えております。

今後ともこれまでと変わらぬ温かいご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

卒業式が挙行されました

コロナ禍で暗いニュースが多いですが、桜の咲くこの時期になるとやはり心浮き立つようになります。皆様お変わりないでしょうか。

中央大学では三月二五日に卒業式が挙行されました。保護者の列席は制限されていたものの、多くの学生が参加しました。学生たちは、今年度なかなか顔を合わせることのできなかった仲間たちとの語り合いを楽しんでいたようです。こんなにキャンパスが賑わったのは久しぶりのことです。

もっとも、人の賑わいを素直に喜ぶことが出来ないのがこのコロナ禍です。新学期からの授業は集合型とオンラインの組み合わせになりますが、学生たちには、気を緩めることなく、充実した大学生活を送ってもらいたいと切に願っています。

卒業式の様子をいくつか、二、三面の下段に掲載いたします。

新型コロナ禍の学生たち

昨春、授業が急遽オンラインでの実施となりました。前号では、教員がどのように取り組んだか、江川先生と杜崎先生にご報告いただきました。今回は視点を一八〇度変えて、オンラインで授業を受けることになった学生たちに、この一年の体験を振り返って語っていただきます。

＊　＊　＊

変わってしまった社会、変わらぬ学び

公共・環境経済学科一年　寺田昌広

一年間の学生生活は、こういった場に綴るには相応しくないかもしれませんが他大の多くの学生同様に「大変空虚な一年でありました。」と著す事も出来たと思います。学内では入学式に始まり対面授業やサークル活動の中止。世間では自粛ラッシュ。憧れていた学生生活は元来のそれとは全く異なる物であって、行き所の無い怒りや不安を抱く日々が続いていたのは事実でした。

しかしながら、「何の為に最高学府の門戸を叩いたのか？」といった事を考えた際に思うのは「社会で活躍するための礎となる学びを得るため」といった理由であります。大きな夢と志に近付くために歴史と伝統溢れる白門の下での学びを求めて勉学に勤しんだ高校時代を思い出しますと、その学びを十分に得ることが出来たといった喜びは非常に大きなものであったと感じます。

先述の様な混乱期に於いても、感染拡大を抑えつつ学びの歩みを止めぬ様に用意されたオンラインと対面の混合による「ハイブリッド型授業」は、学びをより深め先生方と我々学生の距離までをも縮めることも出来たと感じます。ポータルサイトmanabaを通じて送付された豊富な電子資料を漏らす事無く確認出来た「資料・動画配信型授業」、従来と変わらぬ熱い講義をウェブ会議形式で画面越しにリアルタイムで伺えた「双方向型授業」など多種多様で実に素晴らしいものでありました。ソーシャルディスタンスが叫ばれる中であっても、先生方と学生の学びに対する熱い思いといったものは決して離れるものでは無く寧ろ近づいたものであったと感じます。

大きな〝変化〟の中でも〝変わらぬ学び〟を提供して下さった先生方から学生生活に関する相談等にもご対応頂いた学部職員の方々…多くの方々のお陰で「充実した一年」となった事に心から感謝申し上げたく思います。まだまだ暗い時勢と様々な変化は続いてしまうと思われますが、来期の〝変わらぬ学び〟そして〝その先の学び〟が楽しみです。

コロナ渦での学生生活について

経済学科二年生　渡辺理心

今年度の授業はほとんどがオンラインとなり、今までにない新しい環境のもとで学生生活を過ごすこととなりました。オンライン授業というこの新しい取り組みを体験したことを書きたいと思います。

二〇二〇年一月下旬頃から新型コロナウイルスの感染が拡大し、二〇二一年度の授業がスタートするころには、すでに学校生活が今までのように通学できる状況ではなく、この先どうなるのか不安でいっぱいでした。地方に帰省していた私は東京に戻ることもできず、実家からのオンライン授業という形で大学二年生の一年間、授業に取り組みました。全てが今までに体験したことのない環境下での取り組みであり、戸惑う

ことだらけでした。

それに加え、二年生になって挑戦してみたいことがたくさんありましたが、そうした自分が想像していたような一年間を過ごすことができなくなったという絶望感も大きかったです。いざ授業が始まると、一日中家にこもってオンライン授業を受ける日々が続きました。自分が大学生であるという実感が全くわかず、不要不急の外出を控えよということで外出もあまりできず、正直とてもつらかったです。オンラインでは対面授業にくらべ少人数授業でも学生同士のコミュニケーションをとる機会が少なく、交友関係もなかなか深めることができませんでした。

ですが、このような状況になったからこそ、今までの環境がどれほど充実したものだったのか身をもって感じることができました。そしてこの一年のオンライン授業や緊急事態宣言という環境下であったからこそ新しく見つけることのできた趣味や時間の使い方をこれからも大切にしていきたいです。

コロナ中心の世の中の動きは日々思いがけない方向に動いていくことでしょう。そんな中でも大学生活を有意義に送れるよう、次年度はさらに工夫していきたいと思います。

コロナ禍における学部での学生生活

経済学科四年生　張博聞

昨年はコロナ禍という事態の中、私の学部での最後の学期が始まりました。私は二月ぐらいで母国の中国で収集した新型コロナウイルスに関する情報、「無症状の人からもうつる」など、日本人の友達、先生に伝えました。自分も日常生活の中で、感染対策を徹底しました。

私は普段もよくパソコンを操作しますので、オンライン授業に対しては特に抵抗がありませんでした。電車は人が多く、混雑時はマスク着用しても感染する恐れがあります。オンライン授業の関係で、電車に乗る必要もなくなり、通学時間は元々の一時間からパソコンを起動する一分に。先生との距離や先生の声の大きさのせいで説明がよく聞き取れない問題も解決されました。また、私は留学生として、授業の間に意味わからない単語を聞いた時、すぐパソコンで調べることもできました。

もちろん不便もあります。演習論文を書く時、文献はすべてオンラインで閲覧可能ではありません。現物がある図書館に行かなければなりません。ですが、こちらはどちらかというと、文献サイトの問題で、オンライン授業の問題ではないと思います。そのほかに、オンライン授業をやらず、資料をｍａｎａｂａでダウンロードして自分で勉強する授業もありました。そちらに関してはやはり先生の説明がないので、授業を自分で理解するのが大変でした。また、授業中に先生が学生に質問を投げかけたときに、誰がマイクオンにして答えればいいのか少し迷いました。

確かにコロナ禍は誰でも予測できませんでしたが、予測できないからこそ、どのような状況の変化にも対応できる能力を身につける必要があります。リモートワークが推奨されるようになったこれからの社会では、パソコン操作能力を高めておくことは必須だと思います。新型コロナウイルス感染症が有効的な治療薬がない今では、オンライン授業はやむを得ない状況ですが、マイナス効果ばかりではないと思います。これから緊急事態宣言は解除されるとは言え、感染者がゼロになるではありません。オンライン授業を効率的に利用し、大変な状況を乗り越えるしかないと思います。

え、あの先生が　シリーズ㉜

経済学部助教　宮錦　三樹

平成三十年度（二〇一八年度）に経済学部に着任いたしました宮錦三樹（みやきみき）と申します。経済学部において、「財政学」の講義のほか、一年生の「経済入門」、各学年の「演習」、また英国短期留学予定者向けに「英語で学ぶ経済学」という反転授業を担当しております。本学に着任する以前は、立教大学経営学部にて経済学関連の科目を担当していました。

専門は財政学、中でも教育財政です。教育は多くの人が関心を寄せるテーマであり、学術的にも教育学や行政学をはじめ多様な分野で教育政策のあり方が議論されます。経済学的視点に立つと、教育はそのサービスを受ける個人にとどまらない便益が社会にスピルオーバーする外部性を持ち、市場で実現する教育サービスの規模は非効率になることなどから政府の財政関与が支持されます。また所得にかかわらず教育機会の平等が求められる場合にも、公的財源による負担が必要になります。

しかし、どこまで、どのように財源負担を行うことが効率性・公平性の観点からみて望ましいのかという点は難しい問題です。教育政策の財源が限られる中で、政府の教育に対する財政関与はどうあるべきか、議論に役立てられるエビデンスの提示を心掛けながら、教育の財政面に着目した実証分析を行っています。

実は私は学部時代は文学部に在籍して西洋美術史を専攻していました。文化政策に関心を持ち大学院に進学しましたが、その頃、当時の橋下徹大阪市長による文楽協会や大阪フィルハーモニー交響楽団等への補助金カットが大きな話題になりました。普段から文化芸術に慣れ親しんでいる人たちにとっては驚くべき話かもしれません。ですが文化芸術を政府が税金で支援するとなれば、広く社会に向けてその価値を示す必要があるのではと感じ、公共政策の財政面に注目するようになりました。教育政策についても、財源措置の正当性をただ訴えるのではなく、教育への財政関与の根拠やしくみ、その成果を可能な範囲で客観的に示していくことが重要と考えています。

私事でございますが、着任時にまだ〇歳だった娘は、今年で三歳となります。中央大学経済学部の教職員の皆様のサポートのもと、教育・研究活動と育児を両立できておりますことを、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。中央大学の大変充実した教育・研究環境の中で、大学の発展に少しでも貢献できるよう日々邁進していきたいと存じます。

経済学部創立百周年記念奨学金へ募金のお願い（目標金額 6,000万円）

学生のキャリア形成を金銭面から後押しする「経済学部創立百周年記念奨学金」の原資が、三年後にも尽きようとしています。経済学部創立百周年に寄せられた篤志から創設され、以来十年間で約二百名の学生を後押しし、各々が大きな成果を挙げてきた本奨学金を、これからの学生たちにも同様の制度として継続したく、現奨学金への追加という形で皆様の支援を賜りたくお願い申し上げます。

募金方法や税制上の優遇措置など、詳しくは WEB サイトをご覧ください。中央大学ホームページの経済学部トップから黄色のバナーをクリック。スマホは QR コード読込みでお進みください。

編集後記

前号の編集後記では大変なミスを犯してしまいました。退職される先生として三名のお名前を挙げましたが、松本先生のお名前が抜けていました。ここで改めてご紹介するとともに、失礼をお詫び申し上げます。

松本昭夫先生（理論経済学）

さて、二〇二〇年度には四名の先生方がご退職されたわけですが、二〇二一年度には次の三名の先生が就任されます。

岡本千草 助教（空間経済学）
若松直幸 助教（経済学史）
高尾美鈴 任期制助教

若い先生方が、新しい風を中央大学経済学部に吹き込んでくれることを期待してやみません。

（幹事長　濱岡　剛）

2021 年 3 月 31 日　第 78 号
発行　白門経友会常任幹事会
編集　白門経友会編集委員会
〒 192-0393
東京都八王子市東中野 742-1
中央大学経済学部内
URL : www.wg-keiyukai.com
Fax : 042-673-3425